

**A. 聖書解釈と政治思想****オリエンテーション****導入：脳神経科学とキリスト教****1. 聖書の政治思想**

1-1：古代イスラエルと政治—契約・法・王権	4/22
1-2：イエスの宗教運動	5/13
1-3：パウロとローマ帝国	5/20
1-4：聖書と政治思想	5/27

**2. キリスト教社会主義と解放の神学**

2-1：近代社会とキリスト教社会主義	6/3
2-2：宗教社会主義とキリスト教	6/10
2-3：解放の神学の意義	7/1

**3. 現代政治思想とキリスト教**

3-1：イデオロギーとユートピア	7/8
3-2：シュミットからアガンベンへ	7/15
3-3：ジジェクの問題提起	

**Exkurs**

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの	6/17, 24
キリスト教と科学技術	7/22

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

**自然神学の歴史的展開の構図****A. 「宗教と科学」関係史と自然神学**

未分化／調和	／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ				
分化／区別（専門化）／緊張					
古代	中世	近代初頭	啓蒙・19世紀	20世紀	
創造論	二つの書物				
知恵	自然神学	神の存在証明	天文学	生命	心・脳
				進化	遺伝子
					原子力

**B. 自然神学の起源と展開**

1. Natural Theology (*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.)
2. 聖書的前提
  - ・創造論／知恵思想
  - ・パウロ：Rom 1:19-20
3. 古代ギリシャ哲学→キリスト教・教父
  - ・Ingolf U. Dalferth, *Theologu and Philosophy*, Wipf and Srock Publishers, 2001.
  - ・プラトンの自然神学（『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店）
4. ロゴス論
  - ・ミヌキウス・フェリクス『オクタヴィウス』（Minucius Felix, Octavius, XVII,5-11）  
（田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、9頁）  
「ラテン語護教家」
  - ・ストア哲学→アレクサンドリアのフィロン
    - 平石善司『フィロン研究』創文社、1991年。  
「第一部 フィロンのロゴス論」
    - フィロン『世界の創造』（町田啓、田子多津子訳）教文館、2007年。
  - ・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

## 5. キリスト教古代・教父

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press 1993  
, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press 1997

キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

・キリスト教の弁証　　・キリスト教内の論争：正統と異端

## 6. 中世の自然神学→近代へ、二つの書物と知の体系化

### C. 自然神学の社会科学への拡張

#### A. 研究題目

自然神学の言語論的転回とその社会科学への拡張—聖書・環境・経済—

#### B. 研究目的

本研究は、現代の思想的状況におけるキリスト教思想の多様な動向を視野に入れつつ、社会科学（とくに、経済学と政治学）との関連で自然神学を再構築することを目的とする。自然神学は、古代以来、各時代の知的状況に即応しつつ、キリスト教思想と他の諸思想（諸科学）との創造的な関わり合いのために必要な理論的基盤の構築を担ってきた。本研究は、この自然神学の営みを現代の思想状況において継続的に発展させるとともに、環境と経済をめぐる現代の深刻な危機的状況に対して、宗教・キリスト教が蓄積してきた伝統的な知恵を、有意味な仕方で再提示することを意図している。そのために本研究では、言語論的な視点（宗教的象徴と宗教言語、特に聖書との論理的修辭的連関）に基づく自然神学の拡張が試みられる。ここに本研究の独自性がある。

### <導入：脳神経科学とキリスト教>

#### A. 自然神学の最新の動向から

1. 「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第27号 2007年12月、pp.1-19）
2. 「脳科学は宗教哲学に何をもちたか」（芦名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社、2012年8月、pp.19-62）。
3. 「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」（平凡社から 2014 年内刊行の論文集に収録予定）。
4. 「脳神経科学からキリスト教思想へ」（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第2号 2014年3月、pp.1-14頁）。→ 4/10の第二演習にて紹介

#### B. 脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方

##### 一 はじめに

古来より、宗教はさまざまな人間の営みと結び付きながら存在し多様な現象形態を生み出してきた。それに応じて、宗教研究もこの多様な人間の営みに関わる諸学問（哲学、歴史学、文学、政治学、経済学、社会学、心理学、自然科学など）と連携しつつ、今日に至るまでその研究を進めてきている。これが、本稿で「宗教研究ネットワーク」として論じるものの基盤である。ここでは、わたくし自身が専門とするキリスト教研究と関係づけながら、この「宗教研究ネットワーク」の新しい動向について考察を行ってみたい。しかし、以下の議論はキリスト教研究を中心とするものであるに加えて、わたくしがキリスト教研究についてカバーできる範囲も限られている。議論はきわめて限定されたものであり、すべての論点について十分に配慮した議論を行うのは困難である。また、宗教研究ネットワークを論じるからには、「宗教」などの基本的な用語についてある程度の説明が当然必要ではあるが、それについても残念ながら省略せざるを得ない。以上を確認した上で、キリスト教研究以外の研究領域の方々や宗教研究に関心ある方々とも共有可能な仕方で問題や課

題を提示するように心がけたい。

本稿の問題設定と議論の概略をはじめに示しておこう。現代社会はほとんどあらゆる分野・領域で、専門化が急速に進みつつあるが、大学も例外ではない（あるいは大学こそが）。学問の現場では、専門領域が細かく細分化されることによって、キリスト教研究内部においてさえも研究者の相互理解が困難な状況にある。たとえば、聖書学においては——この聖書学と聖書神学とは区別される——、旧約聖書学と新約聖書学が別々の二つの学問領域として存在するだけではなく、聖書を構成する諸文書ごとに、さらには章や節のレベルで細分化された研究が展開され、聖書学の専門家であっても、その全貌を把握するのはほとんど不可能な状況にある。したがって、一般向けの講演は別にして、一人の研究者が十分な専門研究の水準において「聖書の自然観」といった包括的なテーマを論じることは困難と言わねばならない。しかし、いかに専門化が進んだからと言って、一つの研究領域が隣接する研究諸領域との間に構築されたネットワークによって支えられていることは否定できない。その点から判断して、過度の専門化は研究全般の陳腐化と停滞をまねく恐れがある。研究ネットワークの存在は宗教研究にとってもいわば生命線と言うべきものなのである。

この「ネットワークとしての宗教研究」を論じるには、こうした宗教研究のネットワークがどのように生成してきたかについて、その歴史的経緯を念頭に置く必要がある。以下の議論は、まず近代以降における歴史的経緯を確認することから始められる。

次に、わたくし自身の研究テーマに即して、宗教研究のネットワークの実例に目を向けることにしたい。ネットワークとしての宗教研究を論じるには、具体的な事例を取り上げることが必要だからである。取り上げられるのは、「脳・心・宗教」という問題領域にほかならない。わたくしは、これまで自然科学との関連に注目することによってキリスト教思想を研究してきたが、比較的最近関わった研究テーマから、「脳神経科学と宗教」という問題を取り上げ、宗教研究のネットワークを描きたい。

最後に、以上のネットワークとしての宗教研究についての議論をまとめ、さらに若干の論点を取り上げることによって、むすびとしたい。とくに、宗教研究ネットワークの展開の基盤と哲学（宗教哲学）との関わりに留意する。なお、参考文献は、本稿の以下の議論において参照される順序で本稿末尾にまとめることにする。

## 二 近代以降の思想状況とキリスト教研究

宗教研究も特定の時代状況の中で生まれ、それに規定され、また時代と共に変遷しつつ現在に至っている。現代の宗教研究の直接の前提となるのは、近代以降の時代とその学問的状況であり、過去数百年という時間を視野に入れることが必要になる。この数百年という時期は、たとえばフランス革命やアメリカ独立戦争といった出来事からわかるように、近代（啓蒙的近代）が新たな仕方で展開しはじめ、キリスト教的伝統が根底から揺り動かされた時代にほかならない。キリスト教は、この変動を学問的レベルで受け止めることによって、近代的なキリスト教研究を開始することになるが、それは、伝統的な宗教理解（宗教概念）の問い直しを伴っている。現在の宗教研究も、近代あるいは近代以降——ポストモダンという表現もあり得るが——の知的状況の下で成立したものであり、今なおその影響下にある。古典的な宗教哲学の創始者と言える著名な哲学者たち、カント、ヘーゲル、シュライアマハーらは、いずれも宗教概念の問題（宗教本質論）に取り組み、その宗教概念は、現在の宗教研究にとっても貴重な遺産となっている。

またキリスト教研究との関わりでとくに重要なものとして、近代聖書学の成立を挙げることもできるであろう。聖書を伝統的に正典として靈感によって信仰的に読むのではなく、歴史的文献として分析的批判的に、その意味で学問的に読むという態度の出現である。そこには、宗教的生の内部における合理的知的要素の変動が存在する。

しかし、自然科学を典型とする近代的知との関係という点で、キリスト教にとって決定的な意味を有するのは、一連の宗教批判の登場である。これは、近代キリスト教が直面した

諸問題の中でも最大の問題と言わねばならない。近代以降、とくに一九世紀には、キリスト教に対する強烈な理論的な批判が投げかけられたが、その中でも重要なものとして、フォイエルバッハから、マルクス、ニーチェ、フロイトへと至る一連の宗教批判が挙げられる。さらに一八八〇年代には、ダーウィンの進化論あるいはダーウィニズムが、自然科学との関わりという点で、キリスト教に対して、伝統的な生命理解を明確化あるいは再考するように要求するものとなった。キリスト教思想の側から問題を整理するならば、これは種の不変性の理論的な根拠となったアリストテレスに遡る伝統的な生命理解と聖書の物語的生命論との関係をどのように考えるのか、種の不変性はキリスト教の生命論の不可欠な本質的構成要素なのかという問題である。この問いに対するキリスト教思想の答えは一様ではない。しかし少なくとも、聖書の創造物語を進化論と調和的に解釈することが十分に可能であることは、キリスト教と進化論の対立図式を論じる際に、念頭に置くべき論点である。

続いて、以上の宗教批判と並んで現代のキリスト教思想にとって重要なものとして挙げられるべきは、宗教的多元性の問題である。宗教は多様である、これはいわば疑う余地のない事実であるにもかかわらず、多元性の問題が宗教研究においてクローズアップされたのはそれほど昔のことではない。とくにキリスト教研究においてこのような宗教的多元性の問題が正面から扱われるようになったのは、おそらく最近五〇年あるいは七〇年ほどのことだろうと思われる——エキュメニズム（教会一致運動あるいは世界教会主義）と関連した宣教神学といった分野ではもう少し以前に遡る——。それは、複数の宗教の存在が、いずれ克服されるべき過渡的な事態ではなく、人間社会の基本的特性に関わるという自覚の深まりと考えてよいだろう。宗教の多様性の問いは、キリスト教思想において、宗教の神学とか宗教史の神学とかいった仕方で取りあげられて現在に至っており、これは現代のキリスト教思想の主要な問題群の一つを形作っている。

以上の二つの問題は、キリスト教にとって近代以降における最重要問題と言うべきものであるが、「脳・心・宗教」という問題に直接関わるのは、前者の宗教批判である。宗教批判において問われるのは、近代以降の世俗世界において、これだけ科学技術が進歩した時代に、キリスト教を含めた宗教になおもどのような存在意味があるのか、ということであり、キリスト教はそれに対してどう応えるのかという問題状況に直面することになった。脳神経科学はこの問いを再度先鋭な仕方で提出するものとなったのである。それに対して、宗教的多元性は、宗教がこれだけさまざまであるのに、なぜ特定の宗教を信じるのか、なぜ特定の宗教について問うのか、なぜこの宗教なのか、という問題を引き起こすものとなる。もちろん特定宗教との関わりは運命と言えればそれまでも言える事柄であるが、運命という言葉を用いる前に、この宗教を選択するということはいかなることを意味するのかという問いが、キリスト教をはじめとした諸宗教に対して突きつけられねばならない。キリスト教は多様な宗教の中においてどこに位置するのかが問われ、さらに翻って、そもそも宗教とは何であるのかという問題（宗教概念）に再び送り返されることとなる。

以上の考察に基づくならば、宗教研究をめぐる近代の問題状況は、次のようにまとめられるであろう。キリスト教思想研究が直面する問題状況は、宗教とは何か、近代以降の世俗世界に生きる人類にとってなぜなおも宗教なのか、多様に分岐する宗教世界の中のどの宗教なのか、という三つの問いに集約できる、と（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、一九九四年）。ただしこれに関してさらに付言すべきは、現代の宗教研究全体が基本的にこれらの問いを逃れることはできないということである。つまり、これまで見てきた近代以降の問題状況は、キリスト教との関連で典型的に現象しているとはいうものの、おそらくどの宗教も、とくに伝統的な宗教は同じ問いを共有しているのである。これが議論を始めるにあたって確認しておきたい論点である。

本稿では、近代以降の宗教研究のネットワークについて具体的に考えるために、「脳・心・宗教」という問題を取り上げるわけであるが、この脳神経科学とキリスト教思想という問題連関を理解する上で参照すべきは、先に見た一九世紀の宗教批判、とくに一九世紀後

半以降の進化論論争にほかならない。現代キリスト教思想における科学論を規定しているのは、ダーウィニズムを起点とした進化論論争とそれがもたらした「宗教と科学の対立図式」なのであり、とくにここで心がけるべきは、この対立図式がもたらした帰結から教訓を読み取ることである。マクグラスは『神は妄想である』の著者ドーキンスについて次のように指摘しているが、これは、進化論論争にも当てはめることができる。

「ドーキンスは原理主義的二元論（合理主義と迷信の二分法的思考の様態。引用者補足）という彼自身の特定の見方に固執していることは明らかだ。……ドーキンスは物事をかなり二極化した世界観から見ると思われる。それは、彼が根絶させることを望んでいる宗教原理主義の見方と同じくらい終末論的であり曲解された見方なのである。宗教原理主義に対する解決策は、無神論者がその欠点を実際に再現することなのだろうか。われわれには、宗教原理主義と同様、極めて欠点が多く歪んだ無神論原理主義が提供されているのである。」（マクグラス『神は妄想か？ 無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』教文館、二〇一二年、六一頁）

科学的学説をめぐる対立は、対立する相手を論駁するための研究を促進するなど、確かに研究にとってプラスに作用することもあるかもしれない。しかし、原理主義的二元論に陥った論争は相手を迷信的な敵対者（形而上学的な悪）と見なすものであり、結局健全な研究を停滞させることになるのではないだろうか。一八八〇年代から現代に至る「宗教と科学の対立図式」の主要原因の一つとなった進化論論争は、それが宗教原理主義と無神論原理主義との対立となって展開されることによって、おそらくはさまざまな仕方でも可能だったはずの自然科学と協調的な宗教研究を不可能にしたと言わねばならない。その責任はキリスト教研究者（宗教原理主義的）と進化論者（無神論原理主義的）の双方に認められねばならない。進化論者の側にも、あるいはそれに対するいわゆる創造論者の側にも、原理主義的という点では、類似の精神性が存在し、宗教と科学の積極的な関係構築を不可能にしたからである。実際、二つの原理主義がぶつかり合うと、そこでは研究ネットワークの形成が困難になる。それゆえに、研究ネットワークを基盤にする宗教研究が機能不全に陥るような状況は可能な限り回避しなければならない。これが、進化論論争から読み取るべき教訓なのである。

### 三 「脳・心・宗教」問題圏

#### （1）脳科学と宗教——一九八〇年代～二〇〇〇年頃——

脳神経科学の影響は、医療・医学や心理学はもちろん、経済学、社会学、政治学、教育学、そして哲学、倫理学、美学、宗教学まで広範な領域に及んでいる。その中で、脳神経宗教学は、現在その確立をめざして、集中的かつ積極的な研究が行われている分野の一つと言えるかもしれない。キリスト教研究の周辺でも、脳神経科学と関連した研究の蓄積は確実に増加しつつある。本稿では、「脳神経科学と宗教」をめぐる議論を次の二つの時期に区切って検討することにしたい。一つは、一九八〇年代から二〇〇〇年頃までの時期であり、もう一つは、二〇〇〇年以降から現在までの時期である。

まず、第一の時期であるが、これは脳神経科学の成果が人文・社会科学の広い研究領域で注目されるようになった時期であり、こうした飛躍的な展開を可能にしたものの一つが、fMRI（functional magnetic resonance imaging、機能的磁気共鳴画像）を代表とする実験技術の確立である。fMRIは、病院などで見かけられる脳の活動を画像化する装置であるが、これは、宗教現象に関してもかなりの有効性を発揮し、さまざまに使用されている。その結果が、脳神経宗教学と言うべき研究領域の形成であり、その研究成果は多岐にわたっている。ダキリとニューバーグの研究はその代表と言えるものであるが、ここでは、二〇〇〇年頃までの時期の研究成果として、パーシガーについての議論を取りあげることにはしたい。なお、以下の議論はジョン・ヒックが二〇〇六年に出版した著書を参照して

行われる。マイケル・パーシingerは、てんかん発作に関連した側頭葉部分を電極で刺激することによって、てんかん発作のない人も神の臨在感を経験すると報告している。

「パーシingerは脳のこの領域に刺激を与えるためのヘルメット（経頭蓋磁気刺激、TMS）を開発した。また、リン・カーターは次のように報告している。『このヘルメットを使った人のほぼ全員が人の気配を感じ、その多くが聖女マリアやイエスといった宗教的幻影を見たといっている』（カーター Carter 2002,288)。」（ヒック、一七）

これは、側頭葉てんかん発作と宗教経験の関係をめぐるパーシingerのヘルメット（いわゆるゴットヘルメット）の事例について記述であるが、脳の人為的な刺激による宗教経験については、向神経精神薬による擬似的な宗教経験など類似の実験は少なくない。その範囲は、瞑想、純粹意識、無や空の経験、自己超越効果、実在との一体化など、さまざまなタイプの宗教経験に及んでいる。こうした脳神経科学の宗教現象への適用の問題点は、「恍惚状態は右側の扁桃体をオフにすることで生じる。臨在感覚は自我システムを二分することで形成される」とされる場合の「生じる」「形成される」といった表現に端的に現れている。つまり、二〇〇〇年頃までの代表的な脳神経宗教学は、脳と宗教現象（心）との関連が因果的に説明可能であるという前提に基づいているのである。

以上が二〇〇〇年頃までの典型的な宗教研究における脳神経科学の典型的な展開パターンであるが、次にいくつかの論点を指摘しておきたい。まず、従来の脳神経宗教学に特徴的であった「生じる」「形成される」といった表現からもわかるのは、この背後にある、宗教経験とは自然現象に還元され得る一種の妄想であるという自然主義的な主張である。すなわち、宗教経験は脳内の自然のプロセスに関係するというそれ自体はおそらく正当な議論が、脳内の自然のプロセスによって「生じる」ものに過ぎない、自然的なプロセスに還元されるという推論を経て、宗教は妄想であるという主張の根拠として解釈されるという議論の流れである。妄想あるいは迷信とは、先に見たマクグラスの議論に現れたリチャード・ドーキンスの『神は妄想である』という本のタイトルにも表れているように、「脳と心」に関わるこのような推論が進化論論争以来の「宗教と科学の対立図式」を規定されていることは明らかである。この自然主義的な推論のポイントは、脳の自然的メカニズムとプロセスによる宗教経験の因果的説明が宗教現象の虚偽性を帰結する点にあるが、これはまったくの論理的飛躍あるいは論理的誤謬にほかならない。最大の問題は、脳と心（宗教）との関係が単なる相関的な関連性ではなく因果的関係性であるというこの主張そのものにある。この点は後に改めて論じることにして、ここでは脳神経宗教学も進化論論争以来の対立図式による汚染を免れていないこと、それゆえ今後の脳神経宗教学では先に対立図式について得られた教訓——進化論と創造科学双方の原理主義間の不毛な対立こそが回避されねばならないこと——が生かされねばならない点を確認しておきたい。

次に指摘したい論点は、キリスト教だけでなくすべての宗教が「脳と心」という問題圏を共有している点である。先に言及した進化論をめぐり「宗教と科学」関係論の場合には、無神論的進化論者と創造論者（聖書の創造物語こそが真の科学と主張する議論）との対立自体が示すように、争点は科学とキリスト教（あるいは聖書の宗教）との間に設定されていた。しかし、脳神経科学によって、「宗教と科学」関係論の範囲はキリスト教を超えて拡張されることになる。つまり、争点が、脳と心の関係性に置かれることによって、あらゆる宗教がこの問題圏に触れざるを得ないという帰結が生じたのである。なぜなら、宗教において問題となるさまざまな宗教経験や宗教的意識、あるいはそれらと結び付けて言及される魂とか霊とかいった実在は、脳神経科学で探究される脳と心の問題との結びつきにおいて議論されざるを得ないからである。また脳と心という問いが諸宗教において共有され得るものであるならば、適切な問題設定を行うことによって、心をめぐる宗教の比較研究が可能となるかもしれない。さらに、「脳と心」をめぐり宗教間対話も決してあり得ないことではないだろう。このように考えるならば、先に言及した近代以降の宗教的多元性の状

況も、進化論の場合とは異なり、この脳神経科学の問題と決して無関係ではないことになる。まさにこれは、宗教研究のネットワークの現代における一つの新しい進展にほかならない。

一九八〇年から二〇〇〇年頃までの脳神経科学の展開が、fMRIなどの新技術に支えられていたことはすでに述べた通りであり、しかも、それはしばしば自然主義的な解釈と結びつけられることによって、対立図式による宗教批判を反復する傾向に陥りつつあった。こうした対立図式が必ずしも必然的でないことを確認することによって、この時期の脳神経宗教学の問題点をさらに検討しておきたい。そのためにfMRIの仕組みについて立ち入って検討してみよう。fMRIについては、あたかも今、脳の中で現実起こっていることをそのまま実況中継しているかのような理解が一般になされているように思われるが、それは、大きな誤解である。fMRI画像は、実況中継どころか次のような非常に複雑なデータ処理の結果なのである。

まず、fMRIの画像によって一体何を見ているのかというと、それが脳の活動を直接見ているというのは言い過ぎであって、正確には血流量を測定しているのである。問題は血流量と脳の活動とが厳密に対応しているのかという点であり、ここにはブラックボックスが存在していることがしばしば指摘されている。そうであるならば、fMRI画像から宗教経験に関連した脳活動が因果的に説明できるという議論には、現時点では十分に科学的な根拠がないことになる。この点については、今後の精密な理論と実験の進展を待つ必要があるが、いずれにしても、活動そのものを見ることと血流量を見ることは単純に同一視できるものではなく、活動そのものを「見る」ことはいまだ研究課題として残されているのである。

次に、血流量を見ているというのはどういうことかと言うと、これは、活動している時と活動していない時の二つの画像のいわば引き算するという事にほかならない。これは脳が宗教経験に関わる活動するときにそれに関係する脳の部位の血の流れが見えるというよりも、活動時と非活動時の二つの画像を重ね合わせて、どこに新たに血が流れているかを見るということなのである。この一種の引き算をやるのが、fMRI画像データを得るための二番目の操作である。

ここで、さらに最後のデータ処理として次の操作が加えられる。これは一回の画像処理では誤差が生じるので、以上の操作を何度も繰り返し行い、一番上と一番下のデータをカットした上で、平均値と標準偏差を取るという統計処理である。このように、fMRI画像は脳の実況中継であるどころか、非常に複雑なデータ処理をやって、その成果として獲得されたものなのである。

もちろん、こうした指摘はfMRIが脳の病理診断という点で画期的な技術であり重要なものであることを否定するものではない。しかし、こうした実験結果が宗教研究にとって何を意味するかについては冷静に判断する必要があるだろう。さしあたり確認すべきは、fMRI画像は問題の宗教経験がどの脳の部分と相関関係にあるのかに関連している、という点である。すでに述べたように、この相関関係を因果関係として解釈することは、明らかに論理の飛躍と言わねばならない。

結論的には、一九八〇年代から二〇年間くらいのfMRIなどによって獲得された脳神経科学の成果はそれなりに興味深いものではあるが、宗教研究の核心的な問題に到達するには至っていないというのが正当な評価と思われる。つまり、脳の特定部分の血流量が増えるといったデータは、長い修行の結果として到達された宗教経験を研究するための一つの手がかりとしては興味深いとしても、宗教経験に関して問題になる、たとえば神はいかなる実在であり、われわれの人生とどのような関わりを持っているのかとか、あるいは仏への信心は人間存在にとってどのような意義があるのかといった問いを論究することからは、はるかに隔たっているのである。さらに、この脳神経科学と宗教研究の隔たりとの関連で、次の論点を補足しておこう。それは、宗教研究で扱われる宗教現象が、脳神経科学を含めた自然科学において通常行われているような人為的な実験室内の現象——fMRI

による脳機能画像研究における被験者は厳密にコントロールされた認知的課題を拘束度の高い装置内で行う——ではなく、個人と集団とのさまざまな動的連関において生成するという点にある。もちろん、宗教研究においても、特殊な状況下での、たとえば長い修行を経て到達される境地での宗教経験が問題にされることがある。つまり、さまざまな人間関係を遮断することによって、孤独の中で瞑想を深めていって可能となる特殊な経験に関する宗教研究である。これは、一見すると非常に人工的な仕方によって設定された身動きができない状況という点では、脳神経科学における実験と似ていると言えないこともない。しかし、儀礼研究の場合に典型的なように、宗教研究において多くの研究者が取り組んでいるのは、日常性に近いところで生成する宗教現象、いわば普通の状況における宗教現象なのである。瞑想のように一人の孤独な中での経験が問われる場合でも、それは伝統的な様式にしたがって実行され、またさまざまな人々と共有された宗教的な生活というより大きな文脈に位置づけられている。したがって、個人の宗教経験であっても、多数の人々によって共有されるダイナミックな相互関係の中での成立する経験との関連なしに理解できると考えるのは困難である。実験室的状況で獲得された知見から、宗教的生についていったい何が解明できるのかという問題は、慎重かつ詳細な考察を必要とする。今後の脳神経科学に求められるのは、日常的な状況との連関で展開される宗教現象についてその理解を深めるのに貢献するような議論の展開なのである。

以上より、現在の脳研究レベルにおける議論によって宗教理解が格段に深まると考えるのは、あまりにも過度の期待と言わざるを得ない。「脳と心のかかわりを読み解くには、その道のりはまだまだ長い」(苧坂直行、2012、vii)というのが現実であり、宗教研究者としては、脳神経科学の華々しい研究成果を前にして、一喜一憂する必要は当面ないように思われる。fMRIなどの方法を用いた宗教研究についても、これから先、どのような進展がなされるかは予想できない。しかし、その重要な成果を見るにはおそらくまだかなりの時間を必要としており、わたしたちはそれを忍耐強く待たねばならないであろう。

## (2) 社会脳と宗教

.....

次に、宗教研究、とくにキリスト教思想研究の観点から、社会脳研究の注目すべきもう一つの議論を、藤井の研究から取り出してみたい。それは、藤井がリスペクト——「人が人に与える、母子関係に源を持つような無条件な存在肯定」(208)——の問題として示唆するものである。藤井は、このリスペクトについて、次のような議論を行っている。

「人の喜びや幸せは、個人の中にあるのではなく、むしろ他者との関係性の中にある。」  
(198)

「双方向的な社会的コミュニケーションが、わたしたちが生物として存続する必須の条件になっていると考える方が正しい気がします。」(205)

「母親が与えてくれる関係」「存在そのものを無条件で認めるという態度」(206)が人間存在には不可欠であり、「リスペクトの欠如が与える影響は短期間では出てこない」としても、「その欠如はボディブローのように社会を徐々に疲弊させる。」(214)

藤井がリスペクトして取りあげる問題は、マイケル・スペジオ(Michael L. Spezio)が社会脳とキリスト教思想との関連について議論する際に取りあげる愛(アガペー)の問題へと結びつけることが可能である。リスペクトあるいは愛は、脳神経科学とキリスト教思想との実りある対論が可能なテーマとなり得るであろう。

たとえば、ブーバーは『我と汝』において、〈我—汝〉と〈我—それ〉という二つの根源語に基づいて、この世界における人間存在の様態(人間のあり方基本型)を論じている。〈我—それ〉が社会的役割の中に典型的に見られるような人間存在の部分的関わりとして現象するのに対して、〈我—汝〉において問われるのは人間存在における人格的な全体性である。

人間はこの二重性において生きているわけであるが、ブーバーの議論の中心は、〈我—汝〉の方に置かれている——物質自体が悪でないのと同様に〈我—それ〉もそれ自体否定されるべきものではないが——。それは、人間の全体的な人格性が存立するのは、根源語〈我—汝〉に対応した根本態度においてだからであり、〈我—汝〉の相互性は、愛の共同性の基盤と考えることができる。「愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある」（23）のである。

「真の共同体はすべての人々が生きた中心にたいし、生き生きとした相互関係をもつこと、さらに人々の間で相互に生きた関係をもつことである。人間同士の相互関係は、生きた中心と関係を結ぶことから成り立つのであって、人間の相互関係だけで生ずることはない。」（58）

ブーバーにおいては、こうして、〈我—汝〉関係から「生きた中心」としての第三のもの（〈なんじ〉の中心的な現存）、そして「永遠の汝」へと思索が進められてゆくことになるが、こうした宗教性の核心点に向かう思索を可能にしているのは、次のような人間理解なのである。すなわち、人間においては関係が個体に先行しているのであって、その逆ではないということ、また関係は相互的であることである。相互的な関係性から分離された個体あるいは個人という人間理解は抽象的で人為的な議論であり、そこからは、真の共同体にも真の自己にも至ることはできない。

人間が関係存在であるというこの理解は、社会脳とは「関係構造の変化に応じて、わたしたちのふるまいを適応的にコントロールしている脳のしくみ」（169）である、という仕方です。社会脳研究において提示されているものに対応している。まさにこの地点から、リスペクトは人間の幸福や喜びと決定的な関わりがあるという議論が可能になるのである。これは、キリスト教思想が愛の問題として追及していた人間理解、またブーバーが対話論的な人間学として展開した人間理解から決して遠く隔たったものではない。むしろ、この人間理解の中に、社会脳研究とキリスト教思想との間にネットワークを構築するという企ての可能性を見出すことができるのではないだろうか。

もちろん、以上のような議論がネットワークとしての宗教研究に何をもたらすかについては今後の研究の進展を待たねばならない。実際、「自己と他者を結ぶきずなどとしての社会意識がどのように脳内に表現されているのかを探る気の遠くなる作業は、まだはじまったばかりである」（苧坂、2012、i）。しかしまた同時に、脳神経科学と宗教研究とのネットワーク構築作業が「実に魅力ある知的冒険」（ibid.）であることは疑いない。

.....

#### 四 むすび

.....

では、このネットワークを具体化し深化させるために何が必要だろうか。これは、宗教研究に関わる研究者の共通の課題であり、それに十分な説得的な仕方では答えるためには、おそらくかなり強力な理論的な基盤構築が必要となる。最後に、この理論的な基盤構築に関連して、若干の指摘を行うことによって、議論を締めくくりたい。

自然科学研究の急速な進展を念頭におきつつ宗教研究ネットワーク——宗教研究の内部と外部の双方に広がる——の新たな構築を試みる際に必要となるのは、宗教と科学の関係性をめぐる哲学的思索である。現代の多様に分岐した哲学思想の中で何が宗教と科学の関係理解の基盤となり得るかについては、さまざまな意見があるだろう。またそもそも、そのような哲学思想を現代に見出しうるかということも問題かもしれない。しかしギリシャ哲学の発端から現代に至るまで、哲学的思惟が多岐に分岐した知のネットワーク構築の基礎論を提供してきたことは否定できない。これは、哲学の誕生の現場である古代ギリシャにおいて、自然哲学からプラトン、アリストテレスまでの哲学思想の展開を概観すれば容易に確認することができる。こうした問題意識が現在の宗教哲学分野における研究者の間

でどの程度共有可能かについて、確定的なことを述べることはできないが、わたくしは、宗教哲学とは、本来「宗教研究の科学性の解明」といった役割を担う学問分野であると考えており、言語をめぐる問題領域を中心に考察を進めつつある（芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、二〇〇七年、など）。ともかくも、宗教研究ネットワークの再構築は宗教哲学、そして哲学全体の刷新・改訂を要求するものなのである。

こうした連関から見ると、注目すべきさまざまな思想動向が視野に入ってくる。たとえば、最近の心の哲学における「拡張した心」の議論などは社会脳研究との関わりで新たな可能性を感じさせるものである。しかしここでは、とくにキリスト教思想の最近の動向として自然神学の再構築——啓蒙主義的な普遍的な合理性から伝統特殊な普遍性・合理性へ——の動きを指摘してみたい。というのも、自然神学の再構築は、宗教と科学の関係論についての宗教哲学構築の試みと解釈することができるからである。そもそも自然神学とは、キリスト教の成立以前に、古代ギリシャにおいて哲学的神論として成立し、それが後にキリスト教的自然神学として展開したものである。この本来の意味における自然神学に戻るならば、それは宗教と科学の関係論の基礎を論じる宗教哲学として位置づけ直すことができるはずである。しかも、この自然神学（＝宗教哲学）の思索が諸宗教相互の関係論をも視野に入れたものとなり得ることは、先に、「脳・心・宗教」という問題が「脳と心」をめぐる諸宗教の比較や対話を促進するものとなりうると指摘したことからもある程度理解いただけるであろう。宗教と科学という問題領域が、宗教哲学的思索を理論的基盤にして、多元的な宗教的状況の議論に接続されるとき、ここに、ネットワークとして宗教研究の一つの可能性を展望することが可能になる。多様な宗教研究を内包した総合的な宗教学の存在意義はまさにこの展望を現実化することに対して積極的に寄与する点にあるのではないだろうか。

#### 参考文献

1. 芦名定道・星川啓慈共編『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社、2012年。
2. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、一九九四年。
3. マクグラス『神は妄想か？ 無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』教文館、二〇一二年。
4. Eugene d'Aquili and Andrew B. Newberg, *The Mystical Mind. Probing the Biology of Religious Experience*, Fortress, 1999.
5. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、二〇一一年。
6. 井上研、鈴木真奈ほか「ユニット2 脳神経科学の実用化」（伊勢田哲治ほか編『科学技術をよく考える——クリティカルシンキング練習帳』名古屋大学出版会、二〇一三年）
7. 苧坂直行編『社会脳科学の展望——脳から社会を見る』新曜社、二〇一二年。（これは、二〇一二年からスタートした『社会脳シリーズ』の最初のものであるが、現在、このシリーズでは、『道徳の神経哲学——神経倫理からみた社会意識の形成』『注意をコントロールする脳——神経注意学から情報と統合』『美しさと共感を生む脳——神経美学からみた芸術』が刊行済みである。）
8. 千住淳『社会脳の発達』東京大学出版会、二〇一二年。
9. 藤井直敬『ソーシャルブレインズ入門——〈社会脳〉って何だろう』講談社現代新書、2010年。
10. Michael L. Spezio, "Social Neuroscience and Theistic Evolution: Intersubjectivity, Love, and the social Sphere" (*Zygon*, vol.48.no.2 (June 2013), pp.428-438).
11. マルティン・ブーバー『我と汝・対話』岩波文庫、一九七九年。
12. A.E.マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、二〇一一年。
13. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、二〇〇七年。